

聖書:列王記第二14章17~29節

説教:助ける者もいなかった

はじめに

いつものように前回までのあらすじをおさらいしてから今日の箇所に入ります。南王国ユダの九代目の王となったアマツヤは、かつて謀反を起こして父を殺した家来たちを倒すと、その勢いでアラム人との戦争にも勝っていきます。若かった時は主の律法に忠実であったはずなのに、だんだん高慢になってくると、外国の偶像を礼拝するようになり、高ぶった心でイスラエルにけんかを売るようにならざるを得ない。イスラエルの王であったヨアシュは、「あなたは黙って家に引込んでいなさい」とたしなめてもまったく聞く耳を持たない。そのまま戦争に突進するのですが、逆にコテンパンにやられてしまい、アマツヤも父と同じように家来たちからの信頼を失い、謀反により殺されてしまいます。そのことがぎょうの19節に書かれています。今日はそれに続いて23節から見ていきます。舞台は北イスラエルに変わり、父ヨアシュに代わって十三代目の王となったヤロブアムに目を留めてまいります。

## 1 信仰者として

有名な政治家が亡くなると、テレビのニュースや新聞では、その人が政治家としてどのような仕事をしてきたのかを報道します。その人が神からどのような評価をいただいたのかということには、あたりまえのことですが一切触れません。

聖書はそれとは逆さまでです。イスラエルの王について記す時、政治家として何をしたかではなく、まず信仰者としてどうであったのか、そのことから書き始めます。ヤロブアムについてはこう書かれています。24節。「彼は主の目に悪であることを行い、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤロブアムのすべての罪から離れなかった。」

同じヤロブアムという名前なので混乱するので、区別するために初代の王ヤロブアムをヤロブアム一世と呼び、十三代目の王となったヨアシュの子ヤロブアムをヤロブアム二世と呼ぶことにします。

ここに出て来るヤロブアム一世の罪とは何か。話しは、ソロモンが亡くなり息子のレハブアムが王となった時にさかのぼります。高い税金で苦しんでいた人々は、ユダとベニヤミンを除く残りの十部族が結束して北王国イスラエルを建て、南王国とは国交を断絶してしまう。ところが困ったことに、

礼拝すべき神殿は南王国のエルサレムにある。これでは礼拝できない。そこでヤロブアム一世は、金の子牛を造ってこれを拝めと命令し、祭司職や祭りの日を勝手に決めてしまう。こうしてヤロブアム一世は律法に違反して罪を犯してしまった。もちろんすぐに止めなければならぬはずなのに、ヤロブアム二世もこの罪から離れようとしなかった。それで主の目に悪であることを行ったと言われてしまった。

## 2 政治家として

### 1) ヨシュアの時代

では政治家としてのヤロブアム二世の評価はどうであったのか。25節前半。「彼は、レボ・ハマテからアラバの海までイスラエルの領土を回復した。」

レボ・ハマテとはどこのことか。ヨシュアの時代にさかのぼりますが、これから約束の地に入ってくるとき、主があらかじめ約束の地の国境線を教えて下さったことがありました。その国境線の一番北の端にあたるのがレボ・ハマテで、一番南の端にあたるのが塩の海、いまは死海と言っていますが、それがアラバの海です。この約束の地をそれぞれの民族に分け与え、そこにイスラエルの民が住むようになります。

### 2) 主はイスラエルを削り始める

ところが国境線を引いたと言っても、そこに国境警備隊が置かれているわけではないので、外から略奪隊や軍隊がたびたび侵入してくる。そのことが10章32節に書かれています。「そのころ、主はイスラエルを少しずつ削り始めておられた。ハザエルがイスラエルの全領土で彼らを打ち破ったのである。」ハザエルというのは、イスラエルの北東にあったアラムの国の王の名前です。このアラムの国が攻めて来たのでイスラエルはじょじょに領土を失い、それは主のご計画だったというのです。

でもおかしいですよ。ヨシュアの時には、ここが約束の地だからここに住みなさいと言ってくれたのに、今度は約束の地を削ってしまうと言われる。もちろんそこには理由があつて先ほど触れたようにヤロブアム一世の罪から離れようとしなさい。その罪のゆえに領土を失っていくのです。そのいっぽうで、主は預言者を遣わして何度も警告を与

える。ところがどの王たちもヤロブアム一世の罪から離れようとしませんから、その間にどんどん領土は失われていく。このままだと国がなくなってしまいます。

### 3) 領土を回復する

ところがヤロブアム二世が、敵の手から領土を奪い返して回復させた、とある。真っ先に思い浮かぶのは、ヤロブアム二世が強かったからではないか。前回も見たとおり、父のヨアシュが南ユダとの戦いで圧倒的な勝利をおさめるほどですから、北イスラエルの軍隊が強かったのは確かです。それに加えてヤロブアム二世も戦うすべを心得ていたということはあったかもしれない。しかし聖書においては、ただ力が強ければ勝てるというような単純な話しは通じません。すべて背後には神がおられるかどうか。そこを見なくてはなりません。25節後半に書かれています。「それは、イスラエルの神、主が、そのしもべ、ガテ・ヘフェル出身の預言者、アミタイの子ヨナを通して語られたことばのとおりであった。」

ヤロブアム二世が領土を回復することについては、すでに預言者ヨナを通して語られていた。つまり、ヤロブアム二世だけの力ではなく、はじめから主のご計画だったというのです。

それはよいとして、ここで一つの疑問が浮かんできます。彼は主の目に悪であることを行っていたはずですが、それなのにどうして神は不信仰な王に力を貸すのか。神は気まぐれなのでしょうか。そんなはずはない。

## 3 神

### 1) 預言者ヨナ

ここに出て来る預言者ヨナは、あのヨナ書に出てくるヨナと同一人物です。「ヨナを通して語られたことばのとおりであった」とありますが、そのことは聖書を調べても出てこなくて、その文書が失われてしまったのだろうと考えられています。いづれにしても当時の偉大な預言者であったヨナをわざわざ遣わして、ヤロブアム二世が領土を回復することを語らせたというのですから、神がこのことについてどれだけ思い入れがあったかは、うかがい知ることができます。

### 2) 主のあわれみ

そのことを踏まえてから26、27節を読みます。「イスラエルの苦しみが非常に激しいのを、主がご覧になったからである。そこには、奴隷も自由

な者もいなくなり、イスラエルを助ける者もいなかった。主はイスラエルの名を天の下から消し去ろうとは言うておられなかった。それで、ヨアシュの子ヤロブアムによって彼らを救われたのである。」

アラムの軍隊がたびたび侵入し、食糧や財宝が奪われ、領土も削られていく。その中で人々は苦しみながら助けを求めています。神はそれをご覧になっています。冷たい視線でこの事態を眺めていたのでしょうか。「あれほど警告したのに、罪から離れようともしなかった。自業自得だ。」そう言って放っておいたのか。反対です。どんなにイスラエルが頑なで罪を悔い改めようとししないで、悪に悪を重ね、神から離れていたとしても、なお神はイスラエルをあわれむのです。あなたがたは、どんなことがあっても滅んではならない。わたしがかつてアブラハム、イサク、ヤコブ、そしてダビデに約束したとおり、あなたがたは星の数ほどに増え広がり、やがてダビデの末から真のイスラエル王が誕生する。その約束は絶対に破られることはない。

それで神はイスラエルを助けようとします。しかし、どこを見渡してもイスラエルを助けるのにふさわしい者が見つからない。見つからないので、あきらめたか。いいえ、あきらめない。主の目に悪であることを行っていたはずのヤロブアム二世を用いて、イスラエルを救っていく。これを読んで驚くかもしれませんが、二つの大切なことがわかる。

一つ目。人間の側から言えば、不信仰だったヤロブアム二世を使って助けなければならないほど、イスラエルは罪に墮落していたと言うこと。

二つ目。神の側から言えば、人がどんなに罪を犯し続け墮落していたとしても、神の愛は変わらない。どんなときでも神はイスラエルをあわれんでおられる。

### 3) イエス・キリスト

このことは、そのままイエス・キリストにもあてはまります。なぜ神のひとり子であられる方が、わざわざ人となられて私たちの間に住まわれたのか。ヤロブアム二世のことからやはり二つのことが言えます。

一つ目。人間の側から言えば、私たちを救うことのできる助け人がこの地上にはいなかったということです。ダビデの後に続いた王様の数ですが、数えてみるとちょうど四十人いた。このなかからイスラエルを救える真の王は一人も出なかった。皆、罪に墮落していきます。

私たちもそうです。皆さんも信仰を持たれる前は  
どうしていたか。困ったことが起きれば自分でな  
んとかしなければとがんばった。それが無理だと  
わかると、今度はだれかすばらしい能力、知識を  
持った人に期待する。けれども期待は裏切られて  
きた。結局、だれも自分を救えないと絶望したわ  
けです。私たちの中には助ける者はいません。

そして二つ目。神の側から言えること。神は私た  
ちが罪によって苦しんでいるのを黙って見ておられ  
ないのです。なんとか救わなければと走り出す。あ  
の放蕩息子を迎える父親のように、恥も外聞も捨て  
て、駆け寄ってくる。ピリピ2章6～8節にあると  
おりです。

「キリストは、神の御姿であられるのに、神とし  
てのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空  
しくして、しもべの姿をとり、人間と同じように  
なられました。人としての姿をもって現れ、自ら  
を低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従  
われました。」

私たちの救い主はこのような方です。私たちがい  
ま救われているのは、この神のあわれみによる者  
であることを覚え、今週もこの方の十字架を仰ぎ  
見ながら歩んでまいります。